

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 9 月 24 日現在

機関番号：50101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00339

研究課題名（和文）江戸後期から明治時代に互る日本辺塞詩の研究

研究課題名（英文）A Study of Japanese Frontier Poetry Written in Classical Chinese Language from the Late Edo to the Meiji Era

研究代表者

泊 功 (Tomari, Ko)

函館工業高等専門学校・一般系・教授

研究者番号：10390379

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、江戸後期以降に詠まれた、蝦夷地の人事風俗や自然を題材とする詩を蝦夷漢詩と名付け、加えてそれらを蝦夷地の自然条件、辺境という地政学的条件、またアイヌという異民族との関わりといった要素から分類し、「北方辺塞詩」というサブジャンルを前景化できないかという課題を探究した。そういった視点から北方辺塞詩の条件として、以下のことを明らかにできた。それは1 蝦夷地の特異な地理・自然・気象、2 内地との異常な隔たり、3 アイヌ民族の風俗、4 辺境性・植民地性、5 蝦夷へ行く旅人の送別の5つである。

また、上記の前提的結論を踏まえ、北方辺塞詩と呼べる詩群をできる限り収集して解読し、その詩精神を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで日本漢詩の世界においては、辺境（辺塞）経験のない日本人が詠んだ実感の乏しい辺塞詩しか知られていなかった。その状況を、ロシアの南下により辺境化した蝦夷地を訪れた役人、探検家、辺境警備のための辺塞を築いて警備にあたった松前藩及び東北諸藩の武士といった知識階級が詠んだ詩について、一定の条件下で「北方辺塞詩」と名付け、日本漢詩の（いち）ジャンルとして前景化したことが学術的意義である。

また社会的意義としては、各地に眠る関連の手稿本を「再発見」し、一部世に紹介できたことである。また論文化したのものについては、地域の図書館にも贈呈したので、本研究は地域の歴史を知る一助ともなっている。

研究成果の概要（英文）：In this study, I named the Chinese traditional poems composed in Ezo during the late Edo era as “Ezo-Kanshi”, which were composed about its own customs of Ezo, and I classified them according to the natural conditions of Ezo, the geopolitical conditions of the frontier, and the relationship with the Ainu, in order to explore whether a subgenre called “Northern Frontier Poetry” could be foregrounded. I explored the question of whether it would be possible to foreground the subgenre of Northern Frontier Poetry. From this perspective, we were able to identify the following conditions for Northern Frontier Poetry. 1Poetry born from the relationship with Ainu. 2Poetry about unique geography, nature, and weather. 3Poetry reflecting frontier and colonial characteristics. 4Farewell poem for people traveling to Ezo. Based on the above premise and conclusions, we collected and deciphered as many poems as possible that could be called Northern Frontier Poems, and clarified their poetic spirit.

研究分野：日本漢詩

キーワード：日本漢詩 アイヌ 北方警備（蝦夷勤番） 北方辺塞詩

1. 研究開始当初の背景

(1) 江戸時代までの蝦夷地は文化果つる地とみなされがちだが、松前藩の成立以後、武士の学問的基礎が漢学であったことから、北辺松前にも漢字文化が花開いた。藩の文運振興のため、文政五年(1822)には、藩主松前章廣によって藩校徽典館も開設された。徽典館は漢詩作成もカリキュラムに組み入れ、「御会」と呼ばれる藩主自らが出席する詩会も催された。

函館市中央図書館が収蔵管理する「松前家文書」及び「蠣崎文書」を中心とした史料の中には、画家としても著名な蠣崎波響『梅瘦柳眠村舎遺稿』や、波響の叔父の松前廣長『覆瓿草』、それに彼らから二代後の蠣崎伴茂(号は松濤。波響の孫娘園の婿)『松濤詩草』などの詩稿が遺されている。それらは他の日本漢詩同様に、中国雅文学の伝統に基づき、蝦夷地の風物を漢学的視点で中国本土に見立てて詠む発想が見られた(後述「北方辺塞詩」も一部含む)。

しかし、江戸期半ば以降、ロシアの樺太、千島列島への侵出によって、ロシアによる領土拡張圧力が高まってくると、蝦夷地を詠った漢詩の中には、蝦夷地を国境未画定地帯=辺境と見なし、そういった立場・詩想から蝦夷地を詠む詩人も現れた。先に触れた蠣崎伴茂の以下に紹介する詩、「丙寅六月中旬戸切地営中偶作」もそのひとつである。このような詩はロシアの南下に備える「辺塞」で詠まれたことから「辺塞詩」と呼んでよいものと思うが、従来の日本の辺塞詩とリアリティにおいて発想、詩境が異なるように思われた。

夏猶不夏有寒威	夏 猶ほ夏ならざるがごとくして寒威有り
風氣常多暑氣微	風氣 常に多く 暑氣 微かなり
且道営中最冷涼	且く道ふ 営中 最も冷涼
至今六月豊毛衣	今に至る六月も 毛衣を豊(かさ)ぬ

(2) 中世になって東北地方のまつろわぬ民であった蝦夷(えみし)が平定されてから、日本の詩人は辺境を実際に経験できなくなった。しかし、それでも日本人による辺塞詩は作られ続け、江戸期、唐詩の模倣に価値を置いた木下順庵門下の詩人や荻生徂徠門下の詩人たちは、辺境経験がなくとも、中国の辺境・辺塞を想像して唐詩風の辺塞詩を作り続けた。もちろん中国の辺塞詩人のなかにも、実際の辺境を経験することなく辺塞詩を詠んだ王昌齡のような詩人もいたので、そういった詩を辺塞詩と呼ぶこと自体に問題はない。以下に辺境経験のまったくない中で作られた日本の辺塞詩を紹介しておく。ただ詩中の各語は作者の人生・生活にはまったく相渉らない。

従軍行	室鳩巢(一六五八 - 一七三四)
万幕平沙上	万幕 平沙の上
轅門落日曛	轅門 落日 曛(く)る
龍城胡騎出	龍城 胡騎出でて
魚海漢軍分	魚海 漢軍分かる
鳴鼓連遼水	鳴鼓 遼水に連なり
高旗卷隴雲	高旗 隴雲を巻く
何時清朔漠	何れの時か朔漠を清め
歸去報明君	帰り去って明君に報いん

いっぽう、前項で指摘したように、18世紀半ば以降、ロシアの南下により蝦夷地が辺境化し、その防備強化のために、松前藩だけではなく、幕府から役人(箱館奉行)探検家、蝦夷勤番としての東北諸藩の守備隊が増加すると、蝦夷地を詠んだ詩も増加した。これまでそういった詩を日本辺塞詩のバリエーションと考へて読む研究はなかった。そこで蝦夷地に関する詩を収集し、リアルな辺境経験を詩に詠んだ詩を「北方辺塞詩」として分類していけば、新しい日本辺塞詩像を提示できるのではないかと考えられた。また、それらの詩は日本人の蝦夷地=北海道認識、あるいは異文化認識の、近代以前における原初的なプロトタイプとしても価値がある。

付言しておけば、江戸幕府が終わり、明治政府によって、明治8年(1875)にロシア政府との間で樺太・千島交換条約が締結されると、蝦夷地(明治2年以降は北海道)の国境は平和裏に確定し、制度上の辺境はなくなった。したがって本研究でいう北方辺塞詩とは、蝦夷地が辺境でなくなった明治8年までの詩と定義する。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の3点に集約される。

- (1) 未見(作品成立後、現代人が誰も解読していない)の詩テキストの中から、蝦夷地を詠んだ「北方辺塞詩」に該当するような詩を発掘する。
- (2) 多数の詩を解読していく中で、北方辺塞詩に分類するための要件を定義する。すでに活字化してある詩テキストであっても、それに該当している詩は抽出して収集する。
- (3) 上記、(1)、(2)の詩を収集し、詳細な註と現代語訳を付して「日本北方辺塞詩訳注」(仮称)を作成し、今後の研究のためのプラットフォームとする。

(4)異文化圏との交際方法として欧米流スタンダードが定着する以前の近代前夜、蝦夷地という辺境でアイヌ民族やロシアと接触した日本の作詩可能な知識層は、異文化や辺境をどのように感じたのか。つまり、彼らの詩の中にどのような異文化理解、多文化受容の痕跡が遺されているか考察する。以上(1)～(4)の探求が本研究の目的である。

3. 研究の方法

第一段階 蝦夷地関連の詩、とくに蝦夷地を訪れたことのある有力詩人で、まだ詩集などのテキストが発掘されていない詩人、もしくは発掘されてはいても、研究の進んでいない詩人についての詩作品が収録されたテキストを収集する。または明治以降に活字化はされていても、まだ現代のわれわれにほとんど読まれていないような蝦夷地関連詩を収集する。しかし、たとえば弘化3年(1846)江差雲石楼で開かれた詩会で、頼三樹三郎と松浦武四郎が作詩と印刻で競った「百印百詩」における作品などは、現在研究が進んでいるのでとりあえず収集対象からはずした。

第二段階 弘前藩、南部藩など東北諸藩で蝦夷警備にあたった武士たちは、日記・紀行・詩稿などを遺している可能性があるため、現地の図書館、資料館を訪れ、資料調査を実施する。

第三段階 第二段階までに発掘した詩稿などの資料について、翻字、訓読を施し、北方辺塞詩に該当するような詩をピックアップした後、さらに訳注を施す。この作業をベースに本研究テーマのためのデータベースを作成し、盛唐を中心とする中国の伝統的な辺塞詩との比較検討を通して、蝦夷地を対象とする「北方辺塞詩」の特質について考察する。

4. 研究成果

前記、第一段階、第二段階での調査結果は以下の通りである。

(第一段階)

蝦夷地関連詩を含むテキストとして、管見で確認したものは以下の通りである。榎本武揚・大鳥圭介『北鳴詩史』、栗本鋤雲『唐太小詩』、近藤重蔵『近藤正齋全集』(中に自作の詩あり)、武田斐三郎『竹塘先生詩鈔』、松前廣長『覆瓿草』、蠣崎伴茂(松濤)『松濤詩草』、山田三川『三川詩集』、山梨稻川『稻川詩草』、鈴木茶溪『唐太日記』、松浦武四郎『石狩日誌』、『北蝦夷余誌』、東寧元稹『東海參譚』。

(第二段階)

会津藩による蝦夷警備で、担当地区の根室地方の代官・守備隊長を務めた南摩綱紀(羽峯)と秋月梯次郎(韋軒)については、それぞれ『環碧楼遺稿』、『韋軒遺稿』という詩稿が残されていて、活字化されている。ただし、本課題とは異なる視点であるものの、すでに関連の研究書や論文が公表されているので、調査結果には含めない。

本段階の調査で発掘した唯一の成果は、弘前市立図書館蔵唐牛大六『松前紀行』である。唐牛大六は津軽藩士の儒者で、昌平黌への留学経験がある。大六は、寛政5年(1793)逗留していた根室から函館へ回航したロシア海軍士官ラクスマンが幕府宣諭使と会談する際、南部藩とともに警備を担当する弘前藩の一員として松前を訪れた。本資料に収められた次の詩は、これまで翻字されて解読された形跡がないのでここで紹介する。

「松前客舎望巖城山」(松前客舎にて巖城山を望む)

乗晴極目望郷台	晴に乗じて目を極む望郷台
故国名山隔海開	故国の名山 海を隔てて開く
一片火雲生暑送	一片の火雲 暑を生じて送り
三峯氷雪渡江来	三峯の氷雪 江を渡りて来たる
家懸夢裏何人到	家 夢裏に懸るも何人か到らん
嶽入眼中幾日回	嶽 眼中に入るも幾日か回らん
秀色依然千里影	秀色 依然として千里の影
可堪懷土客愁催	堪ふべけんや 土を懷ひて客愁を催すに

以上、上記「第一段階」「第二段階」で収集した資料の解読を進めた結果、盛唐を中心とした中国の辺塞詩と比較して、日本の北方辺塞詩の内容的特徴として、以下の結果が得られた。

蝦夷地の特異な地理・自然・気象
内地との異常な地理的隔たり、及びそこで生じる心情
異民族=アイヌの風俗
ロシアを仮想敵とする蝦夷地の辺境性と領土意識
蝦夷地へ赴く人への送別詩

また、今後の研究のためのプラットフォームとして、本課題の研究報告を冊子にした。今後資料提供を受けた図書館他に納める予定である。今後の課題として、まだ各地に遺されているであろう蝦夷地関連詩資料を引き続き発掘し、調査を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 泊 功	4. 巻 第7号
2. 論文標題 リンガフランカ（国際共通語）としての漢詩	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語文化研究	6. 最初と最後の頁 13-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泊 功	4. 巻 第91号
2. 論文標題 蝦夷漢詩－元禄期松前阿吽寺僧釈智潤と朝鮮漂流官人李志恒の詩的交流－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 一頁-十頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泊 功	4. 巻 第90号
2. 論文標題 津軽藩儒学者唐牛大六の『松前紀行』について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 一頁-十頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泊 功	4. 巻 第89号
2. 論文標題 北方辺塞詩としての蝦夷漢詩	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 一頁-八頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 泊 功
2. 発表標題 漢詩から見える江戸末期の道南
3. 学会等名 函館市中央図書館令和4年度 第3回郷土の歴史講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 泊 功
2. 発表標題 北方辺塞詩は可能か
3. 学会等名 国語の会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 泊 功
2. 発表標題 辺塞詩としての蝦夷漢詩 幕末道南にゆかりの詩人を中心に
3. 学会等名 全国漢文教育学会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------